

令和八年年頭のごあいさつ



塾頭 高橋光雄

明けましておめでとうございます。

塾生、塾友はじめ皆さまにおかれましては、清々しい
お気持ちで令和八年の年明けをお迎えになられたことと
存じます。

昨年は、人見理事長が体調不良ということで三月に開
らかれた評議員会・理事会において退任され、小野利廣
理事が三代目の理事長に選任されました。小野理事長の
もと、今年も塾頭としての職責を全うする所存でおりま
す。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

人見前理事長は、故渡辺薰理事長の後任として塾経営
にご尽力くださると共に、塾事務所に常駐し、塾生・塾
友やお客様の応接等、塾の存在感を大いに高めてください
ました。体調も安定していることから、月一度の運営委
員会には出席をいただき、引き続き隨時隨想の執筆もお
願いしているところです。

小野理事長は就任のあいさつで、「公益法人改革がスタ
ートしています。来年が評議員の改選期になりますので、
一年間で新たな体制の準備と公益法人改革に適合する制
度の整備を進めていく所存です。立教志塾は創立から三
十五年を経過しました。私たち創立時からのメンバーは、
創立に当たった方々の当時の年齢を越えようとしていま
す。老朽化せずに今一度創立の原点、初心『まちづくり
は人づくり、人づくりは我づくり』を思い起こし、新た
な一步を踏み出していかなければと考えます」と、述べ
られています。

昨年はＮＨＫ大河ドラマ「べらぼう」に、白河市民が
誇りとする松平定信公が準主役として登場し、白河市の
知名度が全国に広がりました。われらの定信公が結城宗
広・親光公親子の活躍を讃えて揮毫した感忠銘全文（二
〇七文字の終わりは『莫民自棄、国能生賢』という八文
字で結ばれています。「民自ら棄つることなくんば、国能
く賢を生ぜん」と読みます。これは、白河地方の人々が
自分の思うようにならないからといってやけになり、自
分自身を見捨てるようなことがなければ、（優れた偉人を
生んだ）この地方から、将来必ず立派な人物が生まれる
に違いない、という予言です。このことばこそ、わがふ
るさと白河の誇りにすべき心です（深谷健著「親と子で
読む松平定信伝」志塾叢書第三号）。この「白河の誇りに
すべき心」「ふるさと魂」を呼び起こすことを、今年の塾
活動の基底に据えたいと思います。

さて、国際情勢はといいますと、中国政府の目に余る
帝国主義的政策や常任理事国でしかも核大国のロシアに
によるウクライナ侵略が、国連体制を事实上崩壊させてい
ます。国内に目を転じると、地方都市・農村の衰退は少
子高齢化の影響も勿論ありますが、軽軍備・経済重視の
国策で豊かさを求めてきた代償ともいえます。バブル経
済が弾けてからは「失われた三〇年」といわれるようにな
り、平和裏にデフレスパイラルから脱却することの難しさを
味わってきました。この外圧と変化に対し、私たちはし
っかりと現実を見つめ、熱狂に促されることもなく、先
人の知恵に学び、柔軟な意識で対応していく必要がある
と思います。麗しく愛しい郷土を荒廃から守るために、
自分のできること、そして自分のありようをお互いに切
磋琢磨していく年にしたいと願っています。